

Title	近現代日本女性服装論 : 性差の規範性が彩る「女らしさ」と「女性美」
Author(s)	小山, 有子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49416">https://hdl.handle.net/11094/49416</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	小 山 有 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 22601 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	近現代日本女性服装論－性差の規範性が彩る「女らしさ」と「女性美」－
論文審査委員	(主査) 教 授 荻野 美穂 (副査) 教 授 川村 邦光 准教授 北原 恵

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、明治期から現代までの日本において女性の服装をめぐって展開されたさまざまな議論を取り上げ、ジェンダーの規範性という視点からの分析を試みたものである。「はじめに」と「おわりに」を除いて6章構成となっており、全体を400字詰め原稿用紙に換算すると約430枚に相当する。

第1章「服装はどのように論じられてきたのか」では、先行研究のうち被服学およびモード論では服装における性別規範の存在を自明のものとして特に問題化してこなかったこと、他方、女性学およびジェンダー論では、村上信彦が『服装の歴史』において打ち出した女性の服装＝抑圧という図式がそのまま踏襲されてきたことを指摘し、より「着る主体」としての女性を視野に入れた研究の必要性を主張している。

第2章「和服改良論と日本女性美」は、明治末期に雑誌を舞台に展開された和服改良をめぐる論争を取り上げ、和服をより衛生的で近代的なものに改めようとする種々の試みが、「女性美」を守るべしという立場からの反対論によって潰えるまでの経緯を叙述する。

第3章「決戦衣生活」の一側面」では、第二次大戦期に非常時の服装として男性には国民服が定着した一方で、女性用標準服を制定しようとする試みは「女性らしさ」を守ろうとする側からの抵抗に遭遇し、モンペの普及も空襲が激化するまで進まなかったことを、

日本女子大学の同窓会会報『家庭週報』の紙面の分析を通して跡づけている。

第4章「中原淳一の女性像」は、女性たちに絶大な人気を誇った画家・デザイナーの中原淳一が、戦後に主宰した雑誌『それいゆ』において視覚的には活発な女性像を描きながら、言説面ではむしろそれとは矛盾するような保守的な「理想の女性像」を説き続けたことを明らかにしている。

第5章「1977 阪大ジーパン論争再考」では、1977年に大阪大学内で起きた女子学生のジーンズ姿の可否をめぐる議論が新聞メディアに取り上げられる中で、論争の焦点が当初の服装の性別規範から教育や文化の問題へとどのようにすり替えられ、ジェンダーの問題が不可視化されていったのかを検証している。

第6章「現代の女性服装と美のゆるぎない関係」は、三浦展の『「かまやつ女」の時代』や『下流社会』を題材に、女性の服装が自由になったように見える現代においても、依然として服装上の「美」を尺度として女性を判断し、序列化しようとする意識や社会規範が根強く存在していることを指摘する。

以上のように本論文は、日本の近現代史の中で起きた女性の服装をめぐるさまざまな論争を取り上げ、そこで「女性らしさ」や「女性美」として何が支持され、何が排除されたのかを、言説資料やヴィジュアル資料を用いて具体的に検討していくことを通して、些末で自明なことのよう思われている服装における性別規範がはらむ政治性について考察しようとするものである。

#### 論文審査の結果の要旨

服装や美の問題は、日本のジェンダー研究の中ではまだ十分な理論化や実証的研究が進んでいない、いわば発展途上の領域であり、1970年代に出版された村上信彦の『服装の歴史』を超えるような本格的研究がいまだに存在していないという事実にも、それは明らかである。その中であって本論文は、服装の持つ政治性を鋭く指摘した村上の視点を継承しながらも、女性を単にジェンダー化された服装規範の受け身の被害者と位置づけるだけではない、服装研究の新たな方向性を模索しようとしたものであり、その問題意識と意欲的な姿勢は評価に値する。

本論文で取り上げられている個別の事例はいずれも興味深いものであり、女性の服装をめぐる、その内容は時代によって変化しつつも、いかに「美」という規範が各時代を通じて根強い力をふるってきたかを明らかにしている。そして服装とジェンダーという視点から日本の近現代史を改めて見直すならば、まだまだ無数の埋もれた脈を発見することが可能であろうとの、今後の展開に向けての期待も抱かせる。また、各章の叙述にあたっては書かれた資料だけでなく、服装というテーマにふさわしく豊富なヴィジュアル資料を収集して詳細な検証を行おうとしている点も評価できる。

しかし、問題点もないわけではない。先行研究の整理に不十分な点が認められることに加え、論者は各章で「女性の服装が変化する時期」の論争を取り上げたとしているが、なぜ数ある中でもその特定の時期のその事例でなければならないのか、また、各章が相互に

どのような関連性を持つのかについても十分納得のいく説明が行われておらず、そのため章毎に対象が恣意的に選択されているという印象を残す結果となった。

また、女性の服装をめぐる議論のみに論者の関心が集中する傾向があり、たとえば中原淳一を論じた第4章では当然視野に入れるべき占領期の状況やアメリカ文化の流入の問題、第5章では70年代の学園紛争やウーマン・リブの影響について論じられていないなど、それぞれの時代における歴史的・社会的文脈への言及が不十分であることが指摘しうる。

さらに論者が第1章において村上の服装史を批判する中で提起した、着る主体としての女性の自律性を歴史の中から浮かび上がらせるという試みがはたしてどれだけ具体的に成功しているかに関しては、議論の緻密さや実証性という点でかなり物足りなさが残る。

しかしながら以上のような問題は今後さらに取り組むべき課題として残るとしても、本論文が新しい視点からこれまでの服装研究の閉塞性と限界を克服しようとする意欲に富んだ研究であることは確かであり、よって博士（文学）の学位にふさわしいものと認定しうる。